

安部公房の『他人の顔』における戦争の記憶と人種問題

リチャード・カリチマン

安部公房、三島由紀夫、今村昌平や勅使河宏のような 60 年代の特筆すべき作家と映画監督を考える際に忘れてはならないのは、かれらの青春期が戦争のただ中だったということである。実際に、この 4 人の芸術家は、わずか 4 年の間に相前後して生を受けている。安部は 1924 年、三島は 1925 年、今村は 1926 年、そして勅使河原は 1927 年に誕生している。ところが、この 4 人の中で、日本の外地で育ったのは、ひとり安部公房だけであった。安部は東京で生まれはしたが、1932 年以来大日本帝国の傀儡国家であった満州国で育った。この日本の植民地主義との共犯関係は、安部にとって決定的なことだった。かれは明らかに左翼作家として、国家暴力の被害者であると見ていた少数派の人々に対する共感を抱いていた。敗戦から数年後に、安部は満州国における自分の青年時代のことを批判的に振り返っている。「簡たんに言うと、われわれ日本人はそこで植民地の支配民族として暮らしていたのだということである。私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現実と意識とは別である。支配民族の特徴はたとえばいま日本にいるアメリカ人であるが、その土地の人間を人間としてよりも、植物や風景のように見るということだ。つまり土地の人間は風物の一部なのである。よほどながく暮らしていても、この事情はなかなか変わらない。これは相手を見失うばかりではなく、同時に自分をも見失っているのだが、その点にはめったに気づこうとしないのだから、やっかいだ。(中略)おかしなものだ。あの抵抗する人々を私たちは匪賊とよび狼のような存在と考え、心から憎み恐れた。無知はコッケイであると同時に、罪悪だと思う」¹。

これはいろいろな意味で興味深い文章だが、まず留意すべきなのは、安部にとって歴史的記憶というものが何よりも重要だったということが読み取れる

点である。かれによれば、現在の現在性は、完全に過去に由来する。したがって、歴史的記憶という問題は、たんなる主観的な枠組みよりもはるかに広い。過去に直面するということは、ただ主観的な意志あるいは決断の問題に還元できないと断言する。人間が歴史の力を感じる、あるいは感じさせられることは、単純に、恣意的に歴史に焦点を合わせようとするからではない。歴史の力は、むしろ客観的なものである。最終的に人間の主観的な歴史的考察のすべてが、歴史の動きそのものにに基づいている。歴史的考察はもちろんさまざまな形態を取りうるが、安部にとってもっとも重要なのは、歴史を、人間の思想や行動を支配している存在として認めざるをえないという点である。

興味深いことに、安部はこの歴史の客観的な力を「幽霊」の概念によって考えている。多くの文学評論家には、この幽霊に対する興味は、安部がサイエンスフィクション作家であるから出てきたこと、と解釈されている。たしかにそれは間違っていないかもしれない。だが、この解釈が浅薄であるのは、そうした解釈ではこの概念のもっとも肝心な点があまりにも脱歴史化されてしまうからである。重要なことは、この幽霊概念を、1931 年から 1945 年までの十五年戦争をめぐって、安部が書いたテキストのなかで理解することだろう。たとえば、野間宏や大岡昇平のように、安部は普通は「戦争作家」とは考えられていない。しかし、実はかれは、短編小説、長編小説、戯曲やラジオ・テレビドラマのシナリオというさまざまな形で、このテーマを繰り返し扱っているのである。そして、そこにきまって幽霊という不気味な存在が現れる。たとえば、1954 年の『変形の記録』という短編小説のなかで、ひとりの中国人老婆が皇軍の兵隊に撃たれ、たちまち魂が幽霊に変形し、その姿で兵隊に向かい「いかりに満ちたまな

¹ 「瀋陽十七年」。1954 年、『安部公房全集 4』新潮社、1997 年、87 頁。

ざしで、ぼくらははげしくせめていたのである」²。1953年のシナリオ『壁あつき部屋』でも、幽霊への言及が見られる。このシナリオには、フラッシュバックの技法で、皇軍一人一人の兵士が、中国人戦争捕虜やフィリピン人の原住民を殺害する場面が現れ、また日本とアメリカの帝国主義を強く批判していた朝鮮人皇軍兵士が登場する。1958年の戯曲『幽霊はここにいる』にも似たようなシーンが入っている。主役の一人はいつも幽霊に取り憑かれていると言い、結局その幽霊は、南方で戦死したと思っていた戦友と分る。

要するに安部公房は、歴史的記憶の力と、それが今生きている人々に取り憑いているということを説明するために、幽霊の概念に訴えているのである。それはたんに十五年戦争に関連することであるだけでなく、より具体的には、その戦争の被害者である植民地的暴力を振るわれた人々にかかわる場面も含んでいる。この取り憑かれるという構造を手がかりにすることで、われわれ読者がふつつ戦争文学とは見なしていない作品も、実は戦争に対する暗示的かつ曖昧な言及を通して、戦争記憶というものがどれほど奇怪なのかを見事に浮かび上がらせた作品であると理解しなおすことができるのではないだろうか。その作品とは、安部のもっとも知られている小説のひとつ、1964年の作品である『他人の顔』である。ここでは、この『他人の顔』という作品をひとつのテキストではなく、複数のテキストとして理解したい。なぜなら、安部は、友人でもある勅使河原宏監督の1966年の映画『他人の顔』のシナリオも書いているからだ。『他人の顔』を書いたのは、かれのもっともよく知られている小説『砂の女』の2年後のことだ。その小説も1964年に勅使河原によって同名で映画化され、国際的にも高く評価されたのだった。『他人の顔』の設定は、1964年の東京となっている。しかし、約300ページにわたる小説の最後の6ページでは、ひとつの映画について書かれている。これは、小説の冒頭で、主人公が「観た」と口早につぶやいた映画だ。安部はいくつかの仕掛けを使ってこの映画を参照するが、肝心なことは、主人公が語っ

ているように、この映画が完全に戦争というテーマに貫かれているという点である。映画の中心の位置に来るのは、広島原爆によって恐ろしいケロイドを負った若い女性である。産業事故のせいで似たように顔が損なわれた小説の主人公は、その映画を観てたいへんな衝撃を受ける。しかも、何か特別な意味があるかのように、その女性は十五年戦争に従軍した旧皇軍兵士が、患者として収容されている精神病院で働いている。旧兵士の患者たちは、もう戦争に敗れたことさえ認知できないほど戦争によって心に痛手を負っているひとびとである。二十年も経っているにも関わらず、軍服を着て、お互いに敬礼しあう。そして、当時の兵隊が皆暗記しなければならなかった軍人勅諭を復唱している。安部はこのシーンを「患者たちは、敗戦の事実も知らず、二十年前に停止してしまっただまの時間のよどみの中で、忠実に過去を生きつづけているのだった」³と描く。

ここで留意すべきなのは、60年代の日本が高度成長の最中であったことだ。それに伴って、日本は、アジア初の夏季オリンピックを1964年、東京で開催したことに象徴されるように、国際社会によって広く承認されるようになっていた。しかし、このような鳴り物入りの宣伝があるからこそ、戦争の記憶がいっそう抑圧されるようになった。日本の社会の当時の支配的な論壇は、他国にも自国にも、戦争暴力の歴史をぼかすような戦後ナラティブを提供することをはかっていた。『他人の顔』のなかで、安部公房は、抑圧されたものの回帰を引き起こし、露呈させることで物語を混乱させようとする。これによって、かれは抑圧の働きを明らかにすると同時に、その抑圧の本質的な限界をも指摘するのである。それは、かれが見事に示しているように、忘却された過去がつねに何らかの形で回帰し、現在を攪乱するからである。

小説の本筋では、相当豊かで快適な東京が出てくるが、顔なしの主人公が他人との交際を通じて感じる怒りや恨みは、その快適さを傷つけている。もっとも、ここでは主人公の個人的な心理状態よりも、歴史的忘却の装置あるいは構造のほうが重要である。

² 『R62号の発明・鉛の卵』新潮文庫、1974年、108頁。

³ 『他人の顔』新潮文庫、1964年、276頁。

安部は記憶の欠点を繰り返し強調している。読者がこの記憶の脆弱性に初めて気づくのは、映画館から帰ってきたばかりの主人公が映画の内容を妻に尋ねられて、「おぼえていない」というやや不思議な答えを返すときである。だが、小説の最後にかれは映画の話をしなかった理由を振り返って、自分と「関係がなかったというよりは、むしろ関係がありすぎて」そうしなかったのだ、という。またほかの場面で、主人公は自分が「その人格を、全体としては思い浮かべることができない」人間だといひ、「記憶喪失症にかかった」と考える。そして自分の顔面損傷について診てもらう医者は、時間の避けがたい論理にしたがって、周りの人が次第にかれの素顔を忘れてしまう、と述べている⁴。

このように安部は、歴史的記憶の欠陥を強調し、忘却された過去のなかでは、実際に起きた出来事の喪失があると強調しているにもかかわらず、逆の運動、すなわち過去が現在に回帰することにも注意を促しているのである。ここでも、安部のほかの戦争作品と同様に、過去の再現は具体的に幽霊によって象徴されている。主人公がいうように、「幽霊を信じていない者が、暗闇におびえる心理と同じことである」。また、もうひとつの場面のなかでは「他人は、亡霊のように、透きとおってしま」うという。最後に、かれの職場を描くときにも「人気のない研究所の建物などというものは（中略）亡霊の館のようなものである」とある。この幽霊への繰り返しの言及は、安部が小説のなかで描いているような歴史的忘却の力に対抗する機能を果たしている。このようにして読者は、現代に潜む暴力が、実は戦時中の暴力の抑圧された記憶に由来するものだということが次第に分ってくるのである⁵。

安部公房は、戦後の復興において国家が抹殺しようとする戦争の記憶をとどめるという課題に取り組んでいた。しかし、見逃すべきでないのは、他国にも自国にも見せようとするこの美化された物語には、日本特有なところが一切ないということである。安部は日本人論というあまりにも陥りやすい罠とは無縁である。たしかにこの戦後日本のナショナル・ナ

ラティブには他国と異なるような要素はいくつもあっただろう。すでに触れたように、60年代の高度成長という現象は重要であり、また、1964年の東京オリンピックという出来事も忘れてはならない。しかし、何よりも安部にとっての目的は、このナショナル・ナラティブの論理あるいは構造そのものを検討することにある。それは、このナラティブによって隠蔽されようとする矛盾点をより効果的に露呈させるためである。ここではトランスナショナルな見地、あるいは比較の見地が必要になってくる。たとえば、フランスが、自由・平等・博愛という国家イデオロギーと根本的に相容れないような50年代のアルジェリア戦争での拷問の普及を否認するように、またアメリカの保守派が、いまでも独立宣言に署名した者の数人が、実は黒人奴隷の持ち主であることをむりやり正当化しようとするように、同様に戦後日本のナショナル・ナラティブは、植民地的暴力の歴史をひたすら軽視しようとするのである。

ところで、このナショナル・ナラティブという論点を軸にして、『他人の顔』のなかの戦争の記憶や幽霊の話から、さらに本書に含まれている人種問題についての分析に目を転じてみよう。むろん、安部にとっては、小説のなかで持ち出す人種というテーマと、日本の十五年戦争に対する見解とは切り離して考えられない。ここでまた、抑圧されたものの回帰のもうひとつの事例が認められる。つまり、小説の本筋のなかで浮かび上がる戦後における人種問題は、小説最後の部分、ケロイドの娘と戦争がまだ続いていると思う旧皇軍兵士が登場する映画に関する文章から現れてくる。その文章のなかで、安部は精神病院を「有刺鉄線で囲まれた」とするが、いうまでもなく日本の戦争の歴史をそれほど容易に囲い込むことはできない。過去から来る痕跡のようなものは必ず逃れてしまうが、戦争という過去から戦後としての現在へ移行するのに伴い、この要素もいささか変わらざるを得ない。それは、なによりも安部の人種問題に関する記述に表れている。

すでに述べたように、安部公房の『他人の顔』は、ふつうは戦争文学として見なされていない。同様に、安部が持ち出した人種問題というテーマも、文芸評論のなかでほとんど論じられていない。しかし、筆

⁴ 前掲、102頁、274頁、151頁。

⁵ 前掲、116頁、214頁、240頁。

者の読解は、それと異なる。戦争と人種というテーマは、この小説のなかで中心的位置を占めているだけでなく、相互に密接に結びついていると考えたい。評論家はふつう、あまりにも本の表面的な要素に注目する傾向がある。たとえば、主人公は産業事故のせいで、実質的に顔がなくなってしまう問題がそうである。かれは、最初は顔を包帯で巻いているが、社会による、特に妻によるひどい拒絶感を感じて苦しんでおり、完全に新しい顔、つまりアイデンティティーを作り直そうとする。この新たなアイデンティティーを武器にして、赤の他人の姿に仮装して、妻の貞節に挑戦する。以上は小説のあらすじだが、私たちはここで、安部自身が巻き込まれている戦時中の植民地主義の歴史に対するかれの立場を理解するために、テキストを貫いている、より曖昧な隠れた戦争の記憶や人種問題の痕跡の位置づけを試みるべきなのである。この戦争の記憶や人種問題の痕跡は、小説のより表面的な、つまり明白な要素と対立するものではない。これらはむしろ、ナショナル・ナラティブの論理によって軽視されるがゆえに、必然的に抑圧されはするのだ。そのために、つまらなくて無意味に見えながら、実際にはテキスト全体を規定している論理が隠れている層を発掘しなくてはならない。これをもとにして、小説のところどころに散在している人種問題に対するいくつかの言及を見てみよう。特別な意味があるかのように、この言及には、安部のいう「黄色人種」だけでなく、白人・黒人に関わるものも含まれている。人種に関する文章はテキストの冒頭から表れる。それは、顔なしの主人公による顔の重要性に関する考えと関連しているものである。たとえば、「たかだか、人間の容器、それもほんの一部分にすぎない顔の皮膚くらいに、なんだってそんな大騒ぎをしなければならないのか。むろん、そうした偏見や、固定観念は、べつに珍しいものでもなんでもない。たとえば、まじないの信仰…人種的偏見」とかれはいう。ほかの場面でも、かれは似た表現をする。「そのいい例が、皮膚の色に対するあの馬鹿げた偏見だ。黒だとか、白だとか、黄色だとか、たったそれだけの相違で機能を停止してしまうような、不完全な顔に、魂の通路などという大任をまかせるのは、それこそ、魂をなおざりに

する態度としか言いようのないことだ」。実は、この発言の文脈で主人公は「日本人と混血の朝鮮人が、より朝鮮人らしく見えるために、わざわざ整形手術を受けたという」記事をふと思い出す。ここには、すでに人種とは、よくあるように生物学的な座標で理解すべきものではない、といった示唆が読み取れるだろう。人種は、けっして固定したカテゴリーではないのだ。それどころか、人種的アイデンティティーという経験論的な問題から、より適切に社会・歴史的な問題へと場面が変わる。人種的アイデンティティーの知覚をめぐる、言説性という還元不可能な要素がつねに存在するのである。この朝鮮人の例は、一見自然的、あるいは生物学的に限定されているようなアイデンティティーが、結局は人工的なものの力の前に屈服せざるを得ないということを示している。言い換えれば、いわゆる自然で生まれつきのアイデンティティーは、個人にとって、絶対に決定的なものではない。なぜなら、それは整形手術を受けることで人工的に左右されうるからである。安部公房が指摘する通り、人種的なアイデンティティーを定義する際、このような自然を支配する人工性をしっかりと考慮に入れるべきである。それは、人種そのものというよりは、人種の言説的・知覚的な効果のほうがはるかに重要だということである⁶。

日本史の中でも、その外でも、さまざまな歴史的な事例を挙げて、この点を証明するのはさほど難しいことではないだろう。たとえば、16—17 世紀には、イエズス会の修道士は、日本人を「白人」として分類していた。ひょっとするとそういう分類は、当時の科学的な厳密さが相対的に欠如した思考が招いた、とるに足らない混乱だと反論されるかもしれない。しかし、留意すべきは、現代社会にも似たような事例が存在することだ。アパルトヘイト時代の南アフリカにおいて、日本人は「名誉白人」と見なされていた。その結果、かれらは黒人や「非白人」のアジア人に禁止されている、さまざまな特権を享受することができた。20 世紀アメリカにおいてユダヤ人、イタリア人、アイランド人などが「白人」として考えられていなかったことも忘れてはならない。また、

⁶ 前掲、14 頁、37 頁、38 頁。

同時期のアメリカで、黒人は悪名高い「一滴ルール」の支配下にあった。そのルールによって、実際の外見に関わらず、アフリカの血統をほんの少しでも持っている人々は「黒人」と分類されていた。かれらは、教育や仕事上の機会を奪われただけでなく、当時「反混血法」が施行されていたため、結婚の自由も相当制限されてしまった。同じような例は枚挙に暇がない。第一に、「白人」「黒人」「黄色人種」のような人種のカテゴリーをめぐっての定義あるいは内容に関して、これまでもこれから合意はまったく存在しないことに留意しなくてはならない。そして第二に、これらのカテゴリーはすべて、言説的なものとして歴史的につねに変化し続けていることも重要である。事実、多くの人種問題の研究者によると、これらのカテゴリーの形成と普及は、西洋の植民地主義の歴史と密接に結びついている。安部公房も、特に朝鮮人の「人種的」アイデンティティーという問題を取りあげており、『他人の顔』の中の人種問題に関わるもっとも重要なシーンにおいて、それと似た立場に立っているように見えるのである。

そのシーンは、日本社会からひどく拒絶感を感じて、ほかの被害民族に慰めを求めるために朝鮮料理屋に入る、という形で展開する。まずこの文章のつねに印象的なところは、自己欺瞞という形を取っている主人公の抑圧感にある。なぜなら、かれは最初に朝鮮料理を急に食べたいと思いながらも、実はそうではなく、その店に入りたいと思っている本当の理由は、むしろ同胞日本人と一緒にではなかなか感じられない共同体意識を求めているのではないかとすぐに気づく。ここで述べたように、この本来抑圧された精神的、歴史的な内容が、遅れて意識上に現れること、これがまさに歴史的記憶のもっとも肝心なところなのである。実は、安部公房も、満州国における「われわれ日本人」が実際「植民地の支配民族」だった、という事後的な確認のなかで自分の過去について同じようなことを認めている。同様に、小説の主人公が本書の最後に、戦争映画の内容を忘れた、という小説冒頭の発言に疑問を投げかけ、実はその映画に強く影響されたことを認める。安部はこの否認という精神構造を浮き彫りにする。「私の意識にはそういうものはほとんどなかった。しかし現

実と意識とは別である」と言うのである。

この現実と意識との差異あるいは遅延は、ほかならぬ安部のいう幽霊概念である。そして、この幽霊は特に、日本の植民地暴力の戦争歴史によって刻まれているものだ。これが主人公を朝鮮料理屋に導かせる理由だと言えるだろう。それは、戦後の在日朝鮮人の存在はそもそも、日本の植民地主義の歴史、とりわけ十五年戦争の間のその歴史なしに、理解するのが不可能であるからだ。ジョン・ダワーが『容赦なき戦争』という人種問題に関する著作のなかでいうように、「1939 年から 1945 年までの間に、67 万人に近い朝鮮人が、おもに鉱山や重工業に従事する目的で日本に連れてこられ、そのうち 6 万人がそれ以上が、劣悪な労働条件のために死亡したと見られている。このほか 1 万人を超える人々が広島と長崎の原爆の犠牲になったと思われる」という⁷。この過去の戦時中の暴力が小説の主人公へも働きかけていると言ってもいいだろう。朝鮮料理屋に入る動機が、たんなる食欲という次元から共同体意識を求める次元まで上がったように、われわれ読者も個人的かつ心理的な次元から国家的かつ歴史的な次元までの上昇という変化を読み取れるだろう。

安部は、人種偏見という現象に対する言及のなかで、この文章を、個人から歴史というより広い範囲への飛躍として読解すべきであると提示しているようだ。小説の主人公が断言するように、「むしろ、ぼく個人は、朝鮮人に対してなんの偏見も持ち合わせてはいないつもりだ。第一、顔なしの身では、偏見を持つにもまずその資格がない。もっとも人種的偏見というやつは、おおむね個人の思惑の外にあるもので、歴史とか民族とかの上に多少とも影を落としている以上、すでにまぎれもない実体なのである。だから、主観的にはともかく、かれらのあいだに避難所を求めたこと自体が、理屈の上では、やはり偏見の変形ということになるのかもしれないが」⁸。この文章はつねに複雑で難解なものであり、しかも人種問題が最終的に個人的というよりも、歴史的なこ

⁷ John W. Dower, *War Without Mercy: Race and Power in the Pacific War* (Pantheon, 1986), p. 47. 邦訳『人種偏見 太平洋戦争に見る日米摩擦の底流』猿谷要監修、齋藤元一訳、TBSブリタニカ、1987年、58頁。

⁸ 『他人の顔』、132頁。

とだと確認するものになっている。しかし、ここで筆者が主張したいのは、安部が持ち出している個人と歴史・民族という二つの極が実際、この箇所最後の出てくる主観性概念に総合されるようになっていくということである。哲学言説において、主観性の概念はふつう主体性の概念と対比して使われている。それは、サブジェクトというものの認識論的・実践的なふたつの側面、つまり、物事を知るという機能においてのサブジェクトと、行為するということ機能においてのサブジェクトを、暗示するためである。多くの場合、このふたつの概念を互いに混同し混用してしまう（それは、民族概念と人種概念との間で頻繁に生じる混同と同じようなことであるが）が、しかしここで重要なのは、何よりも竹内好がいう「主体形成の過程」、つまり主体的技術として理解しようような問題なのだ。

要するに、主体的技術とは、国家が個人を取り込もうとする、つまり、国家自身のより一般的な優先順位に合わせるように、国家が個人の特殊な優先順位を左右することである。日韓関係という文脈において、こういう主体的技術のもっとも悪しき事例が、皇民化という植民地主義政策にある。周知のとおり、これらは、「日本文化」の強制や、学校での日本語使用への一元化、創氏改名の実施、といった手段として現れる。どれもみな、朝鮮人をいわば日本帝国の臣民にするために、植民地体制によって実行された政策である。もちろん、このように朝鮮人は、自分のことを、民族的な意味での朝鮮人としてではなく、むしろより広い意味での日本帝国の臣民として規定するようになる。そこで、大東亜共栄圏を建設するために、こうした協力関係を結ぶのは、日本人だけではなく、台湾人や満州国の人々も含まれるはずだ。この計画はむしろ、日本帝国のイデオロギーにほかならない、その目的は、日本自身の戦争にほかのアジア人たちを動員させるためだった。しかし、ここで留意すべきなのは、安部公房が、小説の主人公が朝鮮料理屋に入るシーンをどんなに皮肉に描いているか、である。なぜなら、二十年前に日本政府が、朝鮮人のなかに日本人との連帯感や統一感を感じさせようとしてさまざまな政策を実施していたように、戦後の東京の現在では、一人の日本人が、ある種の

親近感を得るためにわざと朝鮮人を求めることになっている。こういう歴史的な逆転はおそらく、マルクスの有名な格言によってもっともよく表現できる。すなわち、「歴史は二度繰り返す。一度目は悲劇として、二度目は喜劇として」、と。

注意すべきなのは、主体的技術というメカニズムは、単純に1945年に終わったわけではないということである。たしかに、皇民化政策は主体的技術の極端な事例ではあるが、しかし、安部公房にとっては、国家と個人との関係性はそういうイデオロギー的な操作以外に、決して考えられないということこそ、強調すべき点なのだ。全体として、国家の目的あるいは存在理由は、その構成要素である個人が、自分たちを全体の構成要素として認めるように保証することにある。すなわち、かれらは国家という全体性を自分のものとして受け入れなければならない。換言すれば、国家が目に見えないときこそ、もっとも効果的になる。その場合には、個人と国家との違いを意識しなくなるほど国家が内在化されてしまうからである。1942年の「近代の超克」というシンポジウムもその事例と考えることができる。そこでは、当時の日本の詩や映画、文学評論、歴史学、哲学といった領域のもっとも影響力があった知識人が、日本帝国の軍国主義に対する抵抗ができなくなるほど、その国家イデオロギーを完全に取り込んでしまっていた。安部の小説に関して忘れてならないのは、敗戦後日本に残留した朝鮮人と、1950年代の朝鮮戦争で荒廃した朝鮮から日本まで逃げて来た朝鮮人とが、けっきょくは皇民化政策の時代と実質的に変わらないような構造の支配下におかれたことだ。

日本国家という立場から見ると、朝鮮人やほかの少数民族を皇民化あるいは日本国民化することに伴うひとつの危険性は、かれらがいったん十分な語学的・文化的訓練を受けた後、つまりかれらがいわゆる「本物」の日本人の有するコードをいったん習得した後では、「本物」の日本人と「偽者」の日本人との区別がつかなくなってしまうことだ。これがまさに『他人の顔』のなかで直面せざるを得ない難問なのである。アイデンティティーの問題を繰り返す主題化する文章、アイデンティティーを演じるときの顔あるいは外見の重要性、いかなる社会関係におい

ても何らかの仮面をかぶることの不可避性の強調、したがってこの人為的な仮面をかぶるようなアイデンティティーが、本来あるいは真正なアイデンティティーよりも本質的であるかどうかという問題——こういう問題点は、安部の小説が繰り返し指摘する点である。この意味で、主人公が朝鮮料理屋に入ったらずい真偽の問題を思い浮かべることが、けっして偶然ではない。かれが語るように、「客は三人で、運よく三人ともが朝鮮人らしかった。そのうち二人は、一見したところ、日本人とほとんど区別がつかなかったが、いかにも流暢な朝鮮語のやりとりは、まぎれもなく本物であることを証明している」。そして若いウェイトレスの登場で、事情がいっそう複雑になる。なぜなら、その男性のなかの一人は、朝鮮語から日本語に変えて、日本語で彼女に呼びかけるからである。「おい、ねえちゃん、おまえ朝鮮人の田舎者みたいな顔だな。本当に、朝鮮人の田舎者とそっくりだぞ」。この発言を聞く主人公は、完全に混乱している。それはその店に行く理由が、朝鮮人との交際を求めることにあるからである。問題は、その朝鮮人が日本人と似ていること、しかも、かれらがその二つの言語を簡たんに切り替えられることである。おそらくかれらが日本語で話す朝鮮人か、それとも朝鮮語で話す日本人か？主人公はそのウェイトレスの姿を見てこう考える。「言われた娘が、じつは同じ朝鮮人だったという場合だって、じゅうぶんにありうるわけだ。この年頃の朝鮮人なら、日本語しか知らなくても、べつに珍しくはないだろう。そうなると、あの表現は、自嘲どころか、むしろ好意をふくんだ肯定的な呼び掛けでさえありうる。きっとそうだったのだ。第一、朝鮮人が、朝鮮人という文句を、否定的に使ったりするわけがないではないか」と⁹。

安部はここで、あまりにも人種のあるいは民族的なアイデンティティーにこだわりすぎると、人がいかに理不尽になるかを描いているようである。主人公にとって、あらゆる社会関係は必ず、主体的アイデンティティーという一見固定した不変の基礎の上で生じなければならない。相手が何者なのか、どこ

から来たのか、どういうパスポートを持っているのかといった知識で武装することで、他者との関係性を事前的に測定、つまり中立化できる。適切な社会的、文化的なカテゴリーで自分を表象するようないくつかのコードが備えられていて、そして相手も同じコードを使うように期待されている。こうして、あらゆる偶然性や他者性が、他人との出会いから決定的に除去されてしまう。安部によると、これがまさにアイデンティティーというものの暴力性にほかならない。しかしながら、個人と歴史と国民国家との関係性のイデオロギー的な本質を意識することで、その暴力への抵抗を開始する機会はずねに与えられている。

このシーンは相当短い、小説のなかで中心的な位置を占めている。ほかのシーンに移る前に、最後の文章を分析してみたい。朝鮮料理屋のなかで、注文したものを待っている間、主人公がテーブルの上に置かれている小さいおみくじ機で遊んでいる。十円玉を入れると紙の筒が出てきて、「小吉——待てば海路の日和あり。泣きぼくろを見たら西へ行け」と書いてある¹⁰。かれは、少し恥ずかしさを感じはじめ、朝鮮人に親近感を求めることはあまりに自分が甘えていると考える。かれが言うように、「ぼくの態度は、たとえて言えば、白人の乞食が、有色人種の帝王を仲間あつかいにするようなものだった」。これは驚くべき言葉である。第一に、この特別な文脈のなかでは、「帝王」という表現は明らかに、天皇の名で振るわれていた日本の植民地的暴力の歴史を想起させるだろう（ここで付け加えたいのは、在日朝鮮人という文脈のなかでの天皇に対するこの言及が、同じように戦争の記憶や人種問題を批判的に取り上げている大江健三郎の1967年の小説『万延元年のフットボール』に先んじていることである）。しかし、それに劣らず重要なのは、主人公が自分のことを「白人」に、朝鮮人を「有色人種」にたとえるような人種の対比をするということである。十五年戦争の間に日本で作られたさまざまな図像的なイメージに見られるように、日本人はしばしば、ほかのアジア人たちとは違って、肌の色がはるかに白くて、しかも

⁹ 前掲、133-5頁。

¹⁰ 前掲、134頁。

目立つ西洋風の容貌を持っているように自分たちを描いていた。そこには、暗黙のロジックが見られる。というのも、文明的な「進歩」が人種的に想像されたのだ。したがって、文明や文化というものは、暗黙のうちに白さを連想させ、そして原始という概念が、文字通りにも比喩的にも、肌の色のより濃い人々が住んでいるような暗黒状態として表象されていた。ただし、この文明と原始との対立が人種的にだけでなく、地理学的にも規定されたのだ。すなわち、西洋というものは、従来文明の場として見なされていた。小説中、日本人の主人公は、「有色人種」の朝鮮人とは違って、自分のことを「白人」として表象することを許すのが、おみくじが述べているように、「西へ行」ったからである。たしかに安部公房が理解したように、これはまた、戦後経験が戦争の歴史を繰り返すもうひとつの徴になっているだろう。日本帝国主義の原動力が、西洋との対等性を達成することにあるのと同様、1964年の東京オリンピックでひとつの頂点を迎えた戦後復興も、日本が再び「西へ行く」ための手段を獲得するしるしとして解釈することができよう。

ところが、これは小説のなかの人種問題に対する最後の言及ではない。かなり後に、ふつう文学というジャンルよりも映画のほうによく使われている手法だが、安部公房は、主人公が一人でテレビをつけて外国ニュースを見ているシーンを描く。興味深いのは、そのニュースは、1964年のハーレム暴動に関する報道だった。これは実際に起こった出来事だった。同年夏に、アッパー・イースト・サイドで黒人の中学生が白人の非番の警官によって射殺されたのだった。むろん主人公は、この前に在日朝鮮人と自分を同一視したように、今回もアメリカの黒人と自分を同一視する。実際、かれは顔なしの男女の軍隊が、白人の人種差別に対して反乱を起こすことを妄想する。主人公のこういう反応がいつそう面白いのは、われわれはもうすでに見たように、主人公は自分のことを、「有色人種」の人々と違って、「白人」と同一視してしまうことである。つまり問題は、主人公が絶えず、白人や黒人、ほかのアジア人たちも含めて、他人と自分を同一視する、しかもこのアイデンティフィケーションという過程が、アイデンテ

ィティーをこういった人種のあるいは民族的カテゴリーに還元することを通じて生じることにある。すなわち、主人公はこういう分類の妥当性あるいは正当性を無批判に受け入れてしまう。それは、かれもその「正当性」との共犯関係にあることを意味する。

この問題については、まだ論じる余地があるだろう。しかし、このシーンのなかで強調したいのは、安部公房の小説が全体として、戦争の記憶の抑圧という関心に規定されており、それは抑圧されたにも関わらずではなく、それがあからこそ戦後につきまとう、という私の論点と関わることである。主人公は暴動の報道を見ている間に、アナウンサーの解説を聞く。「ハーレムの街頭は、ヘルメットをかぶった黒人、白人、警官 500 人以上が町にあふれ、さる 1943 年夏以来の警戒ぶり」だというのである¹¹。この 1943 年の出来事への言及は、黒人の兵隊が白人の警官によって狙撃されて傷を負った時に発生した暴動のことだった。読者は、テキストがこの抑圧されたものの回帰をいかに演じるかを把握しなければ、こういう過去への言及は重要とは見えないかもしれない。小説の設定は 1964 年であり、日本が当時、再び先進国、つまりいわゆる「西洋」の一角を占めるような驚くべき復興のただなかにはあるが、一方、あたかも進歩や先進という戦後ナラティブに対する無言の抗議のように、戦争の過去に由来する痕跡が、依然として立ち表れ、現在を乱している。

安部は、アメリカの白人による有色人種への差別という問題に注目しつつ人種のテーマを持ち出した。日本とアメリカという空間的座標、過去と現在という時間的座標の間を行き来する主人公は、戦争映画を語るときに、野球のことに簡潔に触れる。米軍が落とした広島原爆でケロイドを負った娘は、旧皇軍兵士である患者たちの洗濯をする間に、「顔を上げると、建物の切れ目から、日差しをあびた空地が見え、子供たちが無心に野球に打ち興じているのだった」¹²。このモチーフに関して、勅使河原宏の映画版では、安部の小説とも、後のシナリオとも異なる扱いをしている。勅使河原は、子供たちが野球に打ち興じているシーンではなく、むしろケロイドの娘

¹¹ 前掲、260 頁。

¹² 前掲、276 頁。

が、精神病院に出勤し、敷地で野球をしている患者たちを観察しているシーンとして映し出した。かなり後半のシーンでは、ケロイドの娘が自殺する直前に、兄と一緒に旅館に泊まり、兄がテレビで野球の試合を見ているという、もうひとつ別の野球への言及が見られる。さて、ここで問うべき問題は、なぜ野球なのか、そして野球は、安部が持ち出す人種や戦争のテーマとどういうふうに関結しているか、ということである。

周知のとおり、野球はそもそもアメリカによって日本へもたらされており、この意味で野球の試合を見ているケロイドの娘のシーンは、隠蔽されているアメリカの存在に対する二重の参照関係をもっているのである。野球がアメリカから日本へ入ってくる歴史は、人種の歴史そのもの、とりわけ、いわゆる「有色人種」の人々に対するアメリカの人種差別の歴史と切り離しては考えられない。日本の野球は十九世紀末から始まった。その当時、旧制一高が野球の中心になり、その選手たちがすぐに白人のみの横浜アスレチック・クラブに試合を申し入れたが、クラブの方針として非白人を相手にしないため、断われたことがある。このような人種差別はもちろん、その白人の選手たちに限られたものではない。そうした姿勢は、当時ひろく普及していた白人優越論に由来し、人種の異なる人々とは交際を禁止するという社会ダーウィン主義の一部になっていた。言うまでもなく、まったく同じような人種差別がアメリカ国内でも強く作動していて、黒人をプロ野球から排除してしまう悪名高い「カラー・ライン」が初めて引かれたのである。

アメリカにおける黒人やアジア人に対しての白人優越論が、戦時中、さまざまな形態を取っていたが、私がここで主張したいのは、ただ安部が『他人の顔』のなかでその歴史を示唆しているかのようにみえることだ。安部のテキストによって示されているのは、十五年戦争における人種差別や植民地主義的な暴力が、現在も、幽霊のように、いまだにつきまとっている、ということである。